

# 教材としての『百科事典少女』と『最果てアーケード』 所収の『百科事典少女』

大橋 幸雄

## 1 はじめに

『百科事典少女』は、東京書籍『新編新しい国語3』（2016年2月発行）に掲載されている、小川洋子（1962年～）の作品である。

『教師用指導書研究編』の「出典」によれば、『百科事典少女』は、連作短編集『最果てアーケード』（講談社、2012年）に所収されており、教科書教材化にあたり、作者に検討を依頼し、原典から一部割愛したり表現を改めたりしているとある。

生徒は、教材となった『百科事典少女』を一つの作品として読み、学習目標である「場面や登場人物の設定の仕方を捉えて、作品を読み味わう」ことや「場面の展開や表現の仕方に着目し、作品を評価する」ことを学んでいく。

教材研究にあたり、原典との違いや、『最果てアーケード』所収の他の作品とのつながりを調べてみると、連作短編集の中の一編だったものを独立した作品として読み味わっていく授業では、表現に込められた、話者である「私」の思いを十分に読み取れないのではないかと感じた。拙稿では、その部分を明らかにして、『最果てアーケード』所収の作品としての『百科事典少女』として読み味わう楽しさについて述べてみたい。

## 2 原典から割愛したり表現を改めたりしている部分

- ① 原典（注1）40ページ9～14行目「誕生日とクリスマス、父は必ず本をプレゼントしてくれた。『小公女』『ニルスのふしぎな旅』『太陽の戦士』『グリム童話選』『青い鳥』そして『あしながおじさん』。リボンを解くと私はすぐにそれを読書休憩室の本棚に並べた。新しい本を一冊、棚の奥にすっと滑り込ませる感触が私は好きだった。それを読むのと同じくらいの、胸の高鳴りを覚えた。一冊分の厚みだけ自分の世界が広がったようで、なぜかしら誰にともなく自慢したい気分になった。」の後の次の表現が教材（注2）では割愛されている。

「私が読書休憩室にいれば、父は安心していた。本さえ読んでいれば子供は安全である、という固い信念を持っていた。二人きりの生活の中で、幼い娘の安全をどう守るかは父にとって重要な問題だった。本のページをめくっている間、子供はふらふら出歩かず、じっと座っている。よって迷

子になったり、車に轢かれたり、友だちと喧嘩をして泣かされたり、泣きすぎてひきつけを起こしたりする恐れがない。薄っぺらなページの中に隠れた人物たち、セーラやニルスやチルチルやミチルほど親身になって我が子を守ってくれる者は他にない。そう信じていた。」（40ページ15行目～42ページ5行目）

この表現があることによって、父が考えた読書休憩室は、「買い物に疲れたお客さんが一休みしたり、連れの子供たちが暇を潰すための部屋」（39ページ7～8行目）としての価値以上に、幼い娘が一人でも過ごせる部屋、娘が安全に過ごしているかどうかを見守ることができる部屋として作られたことが分かる。また、「アーケードのお店のレシートを見せれば誰でも好きなだけ利用できる仕組み」（39ページ9行目）も、お客さんのためであると同時に、たくさんの大人の目で娘を見守ってもらえることを考えた仕組みであろうと考えられる。

「読書休憩室のあるアーケード。この発想に父は満足していた。」（40ページ5行目）とあるが、父親の満足は、お客さんのための読書休憩室であること以上に、母親がいない「二人きりの生活」（40ページ16行目）の中で、仕事をしながらどう娘の生活を見守っていくかという父親にとっての最大の問題への解決策としての読書休憩室の実現に満足していたのである。

この「二人きりの生活」という割愛された表現がなければ、『百科事典少女』の文章中に母親に関する表現は一切ないため、母親がいない生活であることを推測することはできないので、父親の満足はお客さんに対してのものであるとしか読み取ることはできない。

なお、母親については、原典に所収の『紙店シスター』の中で、「この世に絵葉書というものがあると初めて知ったのは、まだ学校に上がる前、五つか六つの頃だった。当時父と私は一か月に一回、母に会うため、遠い町にある療養施設へ通っていた。」（115ページ14行目～116ページ2行目）、  
「しかし、私は約束を守らなかった。雑用係さんに絵葉書も出さなかったし、もう二度とあの療養施設へは行かなかった。母が死んだからだ。そのうえ私はまだ、字が書けなかったのだ。」（126ページ6～8行目）、  
「母の死を理解するまでにはずいぶん時間が必要だった。悲しむために必要な言葉を覚え、それが胸からあふれ出した途端、私は後悔に苦しんだ。なぜ療養所へ行きたくないと思ったのか、どうして母の部屋にもっと長くいなかったのか、私のせいで母は死んでしまったのではないか、と繰り返し考えて泣いた。」（126ページ9～12行目）と描かれている。

幼い頃から療養施設で過ごしている母親とは一か月に一回しか会うことが叶わず、母親と会って

もうまく甘えられない娘を、父親は、ただ悲しい思いで受け止めるしかできずにいた。その上、母親は病が快復することなく死んでしまった。きっと、父親は娘をしっかり育てていくことを、病床の妻と約束したことだろう。読書休憩室は、そんな妻との約束を形にしたものでもあるに違いない。

- ② 原典41ページ6～7行「父が仕事をしている間（大家というのがどういう仕事なのか私には分からず、店主たちと比べて父が働いているようにはとても見えなかったのだけれど）、……」は、「父が仕事をしている間（大家というのがどういう仕事なのか私には分らなかったのだけれど）、……」と一部が割愛されている。

「店主たちと比べて」があることによって、「私」がそれぞれの店の店主たちの仕事をよく見ていたことが分かる。しかし、『百科事典少女』に限っては店主の仕事ぶりに関する記述がないので割愛したものと思われる。

原典所収の『百科事典少女』以外の作品では、『衣装係さん』に「レース屋」、『兎夫人』に「義眼屋」、『輪っか屋』に「輪っか屋（ドーナツ屋）」、『紙店シスター』に「紙店」、『ノブさん』に「ドアノブ専門店」、『勲章店の未亡人』に「勲章店」、『遺髪レース』に「レース屋」、『人さらいの時計』に「軟膏屋」、『フォークダンス発表会』に「勲章店」の仕事ぶりが記述されている。

- ③ 原典45ページ12～15行目「百科事典は丸テーブルの半分近くを占拠した。熱中してくるとRちゃんのお尻は少しずつ椅子から浮き上がり、それにつれて背もたれの手提げ袋はずり落ちていった。やがて片膝が椅子に載り、上半身はつんのめって百科事典を抱え込むような姿勢になった。」の後の次の表現が割愛されている。

「どンドン両足が開いてパンツが見えるくらいになっても平気だった。」（45ページ15行目）百科事典を読むことに夢中になり、周りの人の目が全然気にならなくなっていくRちゃんの行動が手に取るように伝わってくる。「パンツが見えるくらい」という表現は、同性の「私」の目からすれば、ただRちゃんの熱中ぶりを表す描写に過ぎないのだが、生徒に性的表現ととられるのを避けるために割愛されたのかもしれない。

- ④ 原典46ページ2～5行目「アゼルバイジャン共和国の資源や、液体窒素の用途や、山高帽子とシルクハットの違いや、ロマネスク様式の特徴や、学校伝染病の分類について読んだからといって、一体何が面白いのか、正直、私にはよく分からなかった。何が彼女をそこまでのめり込ませるのか、

見当もつかなかった。」の後の次の表現が割愛されている。

「確かに、途中で差し挟まれる写真やイラストの中には、興味深いものがないでもなかったが（例えばロマノフ王朝ニコライ2世の顔はハンサムで素敵だったし、精巣の解剖図は秘密めいて胸が高鳴るほどだった）、その他多くは小学生の女の子には無用の項目だった。」（46ページ5～8行目）

「確かに……興味深いものがないでもなかった」という描写によって、「私」も百科事典を開いてページをめくってみたことがあるのだということが分かる。開いてページをめくってみたが、写真やイラストの中には興味深いものも多少はあったものの、その大半は興味を引くものではなく、ましてや説明されている文章には全く興味を示せなかったのである。ページをめくってみたからこそ、いっそう、同じ小学生の女の子なのに、Rちゃんがなぜ百科事典を面白そうに読むのかが「よく分からなかった」「見当もつかなかった」のである。

この部分が割愛されたのは、写真やイラストの中の興味深いものの例として「精巣の解剖図は秘密めいていて胸が高鳴るほどだった」という描写があり、小学生の女の子に精巣の解剖図が興味のあるものだったという記述が、前述の「パンツ」と同様、生徒に性的表現ととられるのを避けるためかもしれない。

- ⑤ 原典53ページ12～15行目「紳士おじさんの来訪は何年も何年も続いた。終わりは来ないのではないだろうか、と感じることもしばしばあった。それが不安のようでもあり、また一方で、永遠を願う気持ちもあった。しかし私の思いがどうであろうと、間違いなく百科事典は一ページずつめくられていった。」の後の次の表現が割愛されている。

「[そ] [た] がいつしか [ち] [つ] になり、ある日不意に、第6巻が第7巻になった。」（53ページ15～16行目）

「百科事典は一ページずつめくられていった」を具体的に表す描写に過ぎないということで割愛されたのであろうが、この描写によって、この作品自体が百科事典をめくる順番に合わせて描かれていることが分かる。この物語は、「Rちゃんは第1巻[あいう]の最初のページからスタートし、第2巻[えおか]、第3巻[きくけ]と順番に読んでいった。」（45ページ7～8行目）で始まり、「Rちゃんはまだようやく第4巻に差し掛かったところだった。」（48ページ6～7行目）、「労をねぎらうように、彼女は第5巻の背表紙の[し]を撫でた。」（48ページ15行目）と進み、Rちゃんがどこまで読んだのかは分からないのだが、紳士おじさんに引き継がれた百科事典は、「[そ]

「[た] がいつしか [ち] [つ] になり、ある日不意に、第6巻が第7巻になった。」へと進み、「第10巻の最後の項目が書き写された。」（55ページ1～2行目）で終わる。

「百科事典は一ページずつめくられていった」だけでなく、Rちゃんの思いは紳士おじさんに引き継がれ、その思いを最後まで見続けた「私」がいることが分かるのである。

### 3 教材だけでは十分に読み取れない部分

- ① 教材41ページ33～38行目「それはいつかアーケードに現れたセールスマンから父が買った、十冊セットのカラー豪華本で、子供一人の力では本棚から取り出せないくらい重かった。とても高価だったのだが、百科事典を背負って歩き回り、疲れきって気弱になったセールスマンを父が気の毒に思い、無理をして月賦で購入したのだった。」

『輪っか屋』を読むと、「彼はリュックサック一つに百科事典、ことわざ辞典、鉱物事典、歴史年表、法令総覧等々の見本とパンフレットを詰め込み、全国を回って売り歩くセールスマンだった。とにかく扱うのは重い本に限られていた。どんな重量にも耐えられるよう、リュックサックの生地は軍用に開発された特別製で、それでも所々出てくる綻びは継ぎを当てて何重にも補修されていた。子供の頃は、どうしてこんなに痩せっぽちの人が、重たい事典を売る仕事をしているのか不思議だった。骨々しい肩に紐が食い込み、首の筋が浮き出し、苦しい息遣いの中、一步を踏み出すのがやっとという姿を前にすると、それはほとんど苦行か拷問にしか見えなかった。しかし、お客さんの同情を誘うからなのか、営業成績は案外悪くない様子だった。あるいは最初からそういう作戦で、ダイエットに励んでいたのかもしれない。父もその作戦にまんまと引っ掛かった一人だった。」

（85ページ1～11行目）という表現があり、「いつか」が子供の頃であり、「私」もセールスマンと会っていたことが分かる。したがって、教材46ページ28～29行目「『あの時、百科事典を買っておいで本当によかった。』そう、父はつぶやいた。」は、単に父の思いというだけではなく、父と同じように考える「私」の思いでもある。

そのサラリーマンは、Rちゃんが死んでしばらくした頃に会って以来、十年ぶりに姿を見せる。そして、「『いやあ、こんなに丁寧に使い込まれた百科事典と再会できるなんて、滅多にあることじゃありません。セールスマン冥利に尽きる、というものです』」（84ページ2～3行目）という話に加えて、「『一ページ一ページ、ちゃんと人の手と目が触れて、息がかかって、可愛がってもらった証拠が残っている。』」（84ページ12～13行目）と話す。それに対して「私」は、「もし百科

事典がそのように変容しているとしたら、それはRちゃんのお父さんの手が為した働きだった。」

(84ページ15～16行目) と考える。

それから、百科事典を改訂版に買い替えてはどうかと話すサラリーマンに対して、「私」は、新しいものは必要ない、これで十分だと話し、「一字一字それを書き写していた、紳士おじさんの姿を胸によみがえらせ」(86ページ6～7行目)る。つまり、この時すでに紳士おじさんは百科事典の最後までを書き写し終わっていたことが分かる。「私」の年齢で考えてみよう。Rちゃんが亡くなったのが小学生の時だから、12歳。その半年後から紳士おじさんが百科事典を書き写し始め、その時期は10年前にサラリーマンが来た頃と重なるから、今回サラリーマンが来たのは「私」が22歳の頃。その時には、もう紳士おじさんは姿を見せることがなくなっているの、教材48ページ15～16行目「私とベベと店主たちはアーケードを遠ざかってゆく紳士おじさんの背中を見送った。」のは、「私」が22歳の頃だということが分かる。

- ② 教材44ページ5～13行目「『ねえ、見て。第五巻は[し]。し、一文字で一つの巻全部だよ。すごいと思わない?』『うん。』何がすごいのか自信が持てないまま、私は曖昧に返事をした。『この世界では、し、で始まる物事がいちばん多いの。し、が世界の多くの部分を背負ってるの。この、釣り針みたいな頼りない一文字が、実はひそかに一生懸命頑張ってくれているんだよ。』」

実際に百科事典を見てみると、確かに「し」で始まる項目が多いことが実感できる。『百科事典少女』の百科事典の部分の参考文献となった『総合百科事典 ポプラディア (ポプラ社)』でも、「し」で一巻ができています。しかし、『最果てアーケード』を読んでからだと、この「し」が「死」のイメージを強く浮き出させる。

『衣装係さん』では、この物語の場所となるアーケードの紹介のすぐ後で、「私が十六歳の時、町の半分が焼ける大火事があり、近所の映画館にいた父は死んでしまった。」(10ページ4～5行目)と、父の死が語られる。また、「衣装係さん」は、「死者のための服を作り続け」(27ページ16行目)、「ミシンにもたれて息絶え」(34ページ9行目)てしまう。

『百科事典少女』では、Rちゃんの死と「私」の父の死が語られる。(父の死については、教材47ページ35行目「父亡き後も」の数文字でしか表現されていないが。)

『兎夫人』では、「ラビットというあだ名の男の子が、Rちゃんと同じ病院で、同じ頃死んだ、という話を紳士おじさんから聞いた」(77ページ4～5行目)ことが語られる。



『輪っか屋』では、百科事典のセールスマンとの会話を通して、もう一度Rちゃんの死を思い出すことになる。『紙店シスター』では、療養施設で過ごす「私」の母親との面会、そして、その母親の死が語られる。

『ノブさん』では、「ただドアノブのためだけに存在する暗がり」（136ページ6～7行目）、「世界の窪みのようなアーケードに隠された、もう一つの窪み」（136ページ7～8行目）があり、「私」は「Rちゃんが死んだ時も父が死んだ時も、そこでひと時を過ごした。」（136ページ5行目）ことが語られる。

『勲章店の未亡人』では、店主がなくなった後の勲章店の様子が語られる。

『遺髪レース』では、遺髪の配達をする「私」のことに遺髪レースの編み師のことが語られる。

『人さらいの時計』では、アーケードで買い物をしたお客さんを死んだ父と重ねて尾行する「私」のことが語られる。

『フォークダンス発表会』では、町の大火事と父の死が詳しく語られる。

登場する人々は、それぞれに死と隣り合って、たくさんの悲しみを抱えて生きている。しかし悲しみだけではなく、そこには幸せな時間も一緒にある。「死（し）」も「幸せ（しあわせ）」も世界の多くの部分を背負っているのである。

- ③ 教材44ページ26～28行目「Rちゃんはガラス戸の向こう、アーケードの偽スタンドグラスを突き抜け、アッピア街道を通り抜けたもっと遠くのどこかを見つめて言った。」

この表現からだけでは、スタンドグラスが偽物だったということしか分からないが、『最果てアーケード』には、このスタンドグラスについての描写が何度か登場する。

まずは、『衣装係さん』の中で、「屋根にはめ込まれたスタンドグラスは偽物で、すっかり煤け、どんなにいい天気の良い日でもぼんやりした光しか通さない。」（9ページ7～9行目）とあり、このアーケードが一年中薄暗い中にあることが分かる。そのスタンドグラスは、町の半分が焼ける大火事の後も偽物で、大火事の後で改修された屋根も「再び偽スタンドグラスで覆われた。」（10ページ11～12行目）のであり、アーケードは昔からずっと「誰にも気づかれないまま、何かの拍子にできた世界の窪み」（10ページ2～3行目）として存在し続けてきたことが分かる。

次に、『兔夫人』の中では、「夕方、西日が差し込んでくる頃になると、天井の偽スタンドグラスをすり抜けた光が、敷石の上にさまざまな色合いの模様を映し出す。丸とも楕円ともひし形とも

言えないぼんやりした輪郭が、そこここで重なり合い、光の溜まりを作る。それらはどんなに風のない日でも、恥ずかしがるように、あるいはこちらにささやきかけてくるかのように、微かに震えている。その溜まりの中に、白い運動靴を浸して遊ぶのが私は好きだった。Rちゃんが死んだあと、ようやく見つけた新しい楽しみだった。」(59ページ1～6行目)とあり、偽ステンドグラスは、Rちゃんの死の悲しみを紛らわしてくれる存在だったことが分かる。

『遺髪レース』の中では、「私」の幼い時の三つ編みに結った髪で編んでもらったレースが、「アーケードの偽ステンドグラスと同じ模様」(191ページ2～3行目)で「それを日にかざすと、アーケードの敷石に落ちるのと同じ形の影が窓ガラスに映る。」(191ページ3～4行目)のである。そして、「それはレース屋さんのショーウィンドーに飾られている。」(191ページ5行目)、「それはいつまでもずっとそこにある。色が抜け、艶が落ち、元々は小さな女の子の三つ編みだったことを知っている人が誰一人いなくなったあともまだ、アーケードの大事な印をガラスに刻み続けている。」(191ページ8～10行目)のであり、偽ステンドグラスは、そこで生まれ、そこで生き続けるアーケードの象徴であり、アーケードで生まれ、アーケードで生き続ける「私」という存在そのものだとも言えるのである。

- ④ 教材47ページ28～29行目「火事があったとき、心配して翌朝一番にアーケードへやってきたのは紳士おじさんだった。『大丈夫ですよ。』その姿を認めて、最初に私はそう言った。『百科事典は大丈夫です。』」

教材47ページ35～36行目「父亡き後もその遺言を守るように、店主たちは皆黙って紳士おじさんの姿を見守った。」

この二つの表現からは、「この町で火事があったときに、紳士おじさんがアーケードは被害を受けなかつたらどうかと心配して駆けつけてくれた。」ことがあったというエピソードと、「その後何年か経って父が亡くなる時に、みんなで紳士おじさんの姿をずっと見守ってほしいと遺言した。」と読み取るのが普通だろう。そう読み取れば、火事があった時に駆けつけた紳士おじさんの一番の心配事は百科事典が無事かどうかということになり、その紳士おじさんに向かって「私」が百科事典が無事だったことを真っ先に伝えたのも合点がいくし、父親が亡くなる時に、紳士おじさんが百科事典を最後まで書き写すのを見守ってほしいと願ったことも合点がいく。

しかし、この部分は、『最果てアーケード』を読むと全く異なる読み取りが必要になるのである。



前にも述べたように、「私が十六歳の時、町の半分が焼ける大火事があり、近所の映画館にいた父は死んでしまった。」（10ページ4～5行目）のである。つまり、町が火事になったのと父が亡くなったのは同じときなのである。紳士おじさんは、「私」の父が火事で亡くなったことを知って、翌朝一番にアーケードへ駆けつけたのであり、一番の心配は父を亡くしたばかりの「私」のことだったのである。父と二人で生きていた「私」がたった一人になってしまって、ただただ泣き崩れているのではないだろうか、これから先大丈夫だろうか心配して駆けつけてくれたのである。

教材40ページ38～39行目「放課後、家の鍵とハンカチとちり紙を入れた手提げ袋を持ち、ほとんど毎日Rちゃんはやってきた。」ことから想像するに、Rちゃんと紳士おじさんは、「私」と父と同じように、二人きりの生活を送っていたのではないだろうか。そして、きっと紳士おじさんが父に頼んで、Rちゃんを毎日読書休憩室で放課後の時間を過ごさせてもらっていたのだろう。

父と娘という立場は違っても、一人きりになってしまった悲しみを一番知っていたのは紳士おじさんに違いない。だから、一人きりになってしまった「私」が心配でたまらなかったのだ。

翌朝一番にやってきた紳士おじさんの姿を認めて、十六歳の「私」は、「大丈夫ですよ。」と言った。それは、「たった一人になってしまったけど、私は大丈夫ですよ。」の意味でそう言ったに違いない。と同時に、父を失った「私」の悲しみを心の底から心配して駆けつけてくれた紳士おじさんに心配をかけまいとする健気さが、「百科事典は大丈夫です。」という言葉となってつい出てしまったのではないだろうか。しかも、父の死の原因は自分にあるのだと「私」は思っている。そのことは、『フォークダンス発表会』から読み取ることができる。

「十六の冬休み、私はアーケードの配達係としてアルバイトをし、生まれて初めてささやかながら自分でお金を稼いだ。そのお金で映画のチケットを二枚買い、父にプレゼントした」（221ページ10～12行目）のだった。初めて自分で稼いだお金で父にプレゼントしようと思ったのは、これまで男手一つで自分を育ててくれた父への感謝の気持ちだろう。父に二枚のチケットをプレゼントすると、「『じゃあ、お前と行こう』」（222ページ8行目）ということになり、父と一緒に映画を観に行くことになった。父にとっても娘からの最高のプレゼントだったに違いない。父は、アーケード中に自慢して回っていた。

そして当日。父と映画を観に行くことになった時に約束した「『映画館のロビーにある喫茶室で待ち合わせて、軽く腹ごしらえをしてから七時半の回を観よう。』」（222ページ10～11行目）と

いうスケジュールに沿って「私」と父の時間は動き始める。そして、「映画館の厨房で起こったガス爆発から出火」(233ページ7行目)し、「映画館は熱で歪んだ骨組みだけを残して跡形もなくなっていた。……最早どこが喫茶室でどこが客席かも分からな」(233ページ11～13行目)なくなってしまった。娘との約束を楽しみに喫茶室で待っていた父は、その爆発で亡くなってしまった。「私」が映画のチケットをプレゼントしなければ、父と一緒に映画を観る約束をしなければ、その約束が今度の日曜日でなかったら、しかも、軽く腹ごしらえをしてから七時半の回を観るのでなかったら、父は死ななかったに違いない。だから、父の死の原因は自分にあると「私」は思っているはずだ。

そんな悲しい思い、辛い思いの中で、「私」は「百科事典は大丈夫です。」と紳士おじさんに告げたのだ。

父を亡くした悲しみ、その原因が「私」にあるのだという辛さは決して消えることはない。だから、「私」は、『人さらいの時計』の中で、死んだ父を尾行するという行動で、その悲しみ、辛さを受け止めようとする。「私が尾行しているのは、死んだ父だった。顔や姿形が似ているかどうかは関係なかった。ただ、今日の前にある、私を導く世界中でたった一つの背中、それこそが父なのだ、という思いが胸を満たしていた。」(201ページ10～12行目)「もしかしたらお父さんが生きるはずだったかもしれない人生は、こんなにも魅力的なのだ。そう思うだけで私は幸せだった。」(208ページ11～12行目)

つまり、「火事があったとき」から「父亡き後も」と淡々と語られる中に、父を亡くしてもがき苦しむ「私」のやりきれない思いが詰まっているのである。

#### 4 まとめ

『百科事典少女』を一つの作品として読むなら、教科書の50ページの「てびき」にある、「Rちゃんと紳士おじさんの人物像をまとめる」、「『私』が紳士おじさんに伝えたかったこと」、「作品の最後が『ソゴマ』についての百科事典の記述で締めくくられていることの効果」で十分なのかもしれない。

しかし、『最果てアークード』所収の『百科事典少女』として読むなら、読みの中心は『私』のRちゃん、紳士おじさん、父への思いになるはずであり、そう読む方がずっと面白いと考えるのである。

(参考文献)

注1 原典は、『最果てアークード』講談社文庫 2015年5月15日第1版発行を使用した。

注2 教材は、東京書籍『新編新しい国語3』 2016年2月発行を使用した。